

コリント人への手紙 I（コリント教会の皆さんへ I）

ほんとうの愛！ その愛について、著者パウロはことばを尽くして語ります。 当時、コリントの教会には、いろいろな問題が持ち上がっていました。 その原因は、「自分さえよければ、人はどうでもいい。自分のしたいことをして何が悪い。それが自由というものだ」といった態度にあることを、パウロは鋭い目で見抜いていました。 そして、時には厳しいとも思える口調で忠告し、お互いに心から愛し合い、欠点を補い合い、問題を解決するよう勧めています。

—

1 神様に選ばれて、キリスト・イエスを宣べ伝える伝道者となったパウロと、信仰の友ソステネから、 2 神の民として招かれ、キリスト・イエスによって神様に受け入れられる者とされた、コリント教会の皆さん、および主イエス・キリストの御名を至る所で呼び求めているクリスチャンの方々へ。

この主は、私たちの主であると共に、すべての人の主です。

3 どうか、父なる神と主イエス・キリストが、あなたがたをあふれるほど祝福し、すばらしい平安を与えてくださいますように。

4 神様があなたがたにお与えになったすばらしい贈り物を思う時、感謝せずにはいられません。 今やあなたがたは、キリスト様のものとなったのです。 5 キリスト様は、あなたがたの全生活を充実させてくださり、キリスト様について大胆に語る力や、真理を十分に理解する力を与えてくださいました。 6 以前、私が、キリスト様はきっとそうしてくださる、と話しておいたとおりでしょう。 7 今やあなたがたは、あらゆる恵みと祝福とを手にしたのです。 主イエス・キリストのおいでを待ち望んでいるこの時、主のお心になかったことをするのに必要な、あらゆる霊の賜物と力とが、あなたがたには備わっています。 8 そして、主が再び来られるその日に、あなたがたが罪も欠点もない者と認められるように、主は最後まで責任をもって守ってくださいます。 9 この神様の約束は確かです。 神様はいつでも、口にしたことばをそのとおり実行なさるからです。 この神様があなたがたを、神の子、すなわち主イエス・キリストとのすばらしい交わりに、招き入れてくださったのです。

10 しかし、愛する皆さん、私は主イエス・キリストの御名によってお願いします。 仲間同士の言い争いはやめなさい。 教会の中で仲間割れなどしないよう、真の一致を保ってください。 同じ考え、同じ目的で結ばれて、一つ心になってほしいのです。 11 実は、クロエの家の者が知らせてくれたのですが、愛する皆さん、あなたがたの間には、口論や反目があるそうではありませんか。 12 ある人は「私はパウロの弟子だ」と言い、また、ある人は「私はアポロの弟子だ」とか「私はペテロの弟子だ」と言い、また、ある人は「自分たちだけがキリスト様の真の弟子だ」と言っているそうですね。 13 そのように言い争って、キリスト様を小間切れにするつもりですか。

しかし、このパウロが、あなたがたの罪のために死にましたか。あなたがたのだけれ、私の名によってバプテスマ（洗礼）を受けたでしょうか。 14 いま私は、あなたがたのところで、クリスポとガイオのほかには、だれにもバプテスマを授けなかったことを、心から感謝しています。 15 私が新しく、「パウロの教会」とやらを起こそうとしていたなどと考えられては、たまらないからです。 16 そうそう、ステパナの家族にもバプテスマを授けましたね。しかし、そのほかは、だれにも授けた覚えはありません。 17 キリスト様が私をお遣わしになった目的は、バプテスマを授けさせることではなく、良い知らせを宣べ伝えさせるためです。私の説教も、貧弱に聞こえるかもしれません。難しいことばを使ったり、高尚な考えを述べたりはしないからです。それというのも、キリスト様の十字架の教えの単純さに込められているすばらしい力を、そんなもので薄めてはならない、と考えているからです。

18 「イエス様は私たちを救うために死んでくださった」ということばが、滅んでゆく人々にはどんなにばからしく響くか、私にはよくわかっています。しかし、救われた私たちは、これが神の力そのものであると認めるのです。 19 なぜなら、神様がこう言われるからです。

「わたしは、たとえ人の目には
どんなにりっぱに見える計画でも、
人間の側の救いの計画をことごとく打ちこわし、
最も才気あふれる人の、最もすぐれた考えをも無視する。」

20 こうした知識人、学者、この世の重大問題にかかわる議論家たちについては、何と云われているでしょう。神様は、彼らをみな愚か者とし、そんな知恵など無用の長物だときめつけました。 21 この世がいかにも人間のすぐれた知恵を結集しても神様を見いだせないのは、神様のお考えによることです。そして神様は、一般の人には、ばかばかしくて話にならないような神のことばを信じる人を、救うことにされたのです。 22 これは、ユダヤ人には、ばからしく思われるでしょう。彼らは、説かれていることの真実さを証拠立てるような、天からのしるしを求めているからです。また、それ以外の外国人にも、ばからしいと思われるでしょう。彼らは、理性で納得できることとか、賢明と思われることしか信じないからです。 23 それで、人々を救うために死なれたキリスト様について話すと、ユダヤ人は腹を立て、外国人は「まるでナンセンスだ」と言うのです。

24 しかし神様は、ユダヤ人でも外国人でも、救いへと招かれた人々の目を開いて、キリスト様こそ彼らを救う偉大な神の力であることを、悟らせてくださいました。実に、キリストご自身こそ、人々を救うための、神の知恵に満ちた計画の中心なのです。 25 この、いわゆる「ばからしい」神の計画は、最高の知識人の最も賢明な計画より、はるかにすぐれたものです。また、キリストの十字架上の死という神の弱さは、実は、どんな人間よりも強いのです。

26 愛する皆さん。自分たちの仲間を見回してごらん下さい。キリスト様に従うあな

たがたの中には、有名人や権力者や金持ちはほとんどいません。 27 それどころか、神様は、この世では愚か者、無価値な者と思われる人々を、わざわざお選びになりました。 それは、この世で知恵ある者、りっぱな人とされている人々を辱しめるためです。 28 神様は、いわゆるこの世で見下されている者、全く取るに足りない者を選び、そんな人々を役立てることによって、世間では大物と言われる人を、なきに等しい者とされたのです。 29 ですから、どこのだれであっても、神の御前で自慢することはできません。 30 というのは、あなたがたがキリスト・イエスによっていのちを確保できたのは、ひとえに神様のおかげだからです。 キリスト様は、神様の救いの計画を明らかにしてくださいました。 私たちを神様に受け入れられる者としてくださったのは、このキリスト様でした。 この方は、私たちを、きよく聖なる者とし、また、私たちの救いを買取るために、ご自身を投げ出されたのです。 31 旧約聖書の、「だれでも誇ろうとする者は、主のなさったことだけを誇れ」という、ことばどおりになるためです。

二

1 愛する皆さん。 私が初めて皆さんのところへ行った時、神様からのことばを伝えるのに、程度の高い、難しいことばづかいをしたり、りっぱな理論をふりまわしたりはしませんでした。 2 なぜなら、イエス・キリストと、その十字架上の死以外は語るまい、と決心したからです。 3 私は弱々しく、おずおずと、震えおののきながら、あなたがたのところへ行きました。 4 また私の説教も、雄弁な説得力あることばや、人間的な知恵にはほど遠く、全く単純そのものでした。 しかし、そのことばには神様の力がこもっていて、聞く人々は、それが神様からのことばだとわかったのです。 5 私がそうしたのは、あなたがたの信仰が、人間のすぐれた思想にではなく、神様に根ざしてほしかったからです。 6 とはいえ、成長したクリスチャンの間では、私はすぐれた知恵のことばを語ります。 しかしそれは、この地上の知恵ではなく、また、滅ぶべき運命にある、この世のお偉方の気に入る知恵でもありません。 7 私たちのことばに知恵があるのは、それが神様から出た教えで、天の栄光に導く、神様の知恵に満ちた計画を告げるものだからです。 この特別の計画は、以前は隠されていましたが、世界の始まる前から、私たちのために備えられていたものです。 8 しかし、この世の偉い人々は、このことを理解しませんでした。 もし理解していたら、まさか栄光の主を十字架につけるようなまねは、しなかったでしょう。 9 まさに、旧約聖書の次のことばどおりです。

「普通の人が、これまで見聞きしたことも、想像したこともないほどすばらしいことを、神様は、ご自分を愛する人々のために用意してくださいました。」

10 しかし私たちには、このすばらしいことがわかっています。 神様がご自分の御霊を通して知らせてくださったからです。 神の御霊は、神様の最も奥深い秘密を探り出して、それを教えてくださるのです。 11 人が何を考えているか、その人が実際にどんな人間

であるか、本人以外にはわかりません。同様に、神様の考えを知りうるのは、神の御霊以外にありません。12 事実、神様は私たちに、この世の霊ではなく、ご自分の御霊を与えてくださいました。それは、神様からの、すばらしい恵みと祝福という贈り物を、私たちが知るためです。

13 この贈り物について話す時、私たちは、自分が人間として選んだことばではなく、聖霊様によって教えられたことばを使ってきました。つまり、聖霊様のことを説明するには、聖霊様のことばを用いるのです。14 しかし、クリスチャンでない人は、聖霊様が教えてくださる神様の思いを理解することも、受け入れることもできません。彼には、ばからしく思えるのです。というのは、自分のうちに聖霊様をいただいている人だけが、聖霊様のお考えを理解できるからです。ほかの人にはそれが理解できません。15 聖霊様をいただいている人は、すべてを見抜きます。ところが、この世の人は彼を全く理解できないので、まごつき、とまどうのです。16 どうして、この世の人にそれがわかるでしょう。なぜなら、彼は、主の思いを知ったこともなく、それを主と論じ合ったこともなく、また、祈りによって神様の御手を動かしたこともないからです。しかし、驚くべきことに、実際に私たちクリスチャンは、まさにキリスト様の思いと心の一部を共有しているのです。

三

1 愛する皆さん。私は皆さんにクリスチャン生活の面では、まるで子供に対するように書いてきました。あなたがたは、主に従わないで、好きかってに、ふるまっています。そんなあなたがたに、御霊に満たされた健全なクリスチャンを相手にしているようには書けないからです。2 つまり、堅い食物を避けてミルクを飲ませました。堅い食物の消化はむりだったからです。現に今でも、ミルクしか飲めない有様です。3 相変わらず、よちよち歩きもおぼつかないクリスチャンで、神様に従うどころか、好きかってに、ふるまっているのですから。それは、あなたがたが、ねたみ合い、仲間割れをしていることから、明らかです。実際、あなたがたの態度ときたら、まるで主を信じていない人みたいです。4 「パウロとアポロとどちらが偉いか」などと口論して、教会を分裂させている現状では、主にあって少しも成長していないことを、さらけ出しているようなものではありませんか。

5 私たちが争いの原因になるなんて！ いったい、私が何者だと言うのですか。アポロが何者ですか。ただ神様に仕える者にすぎず、それぞれに特別の才能が与えられて、あなたがたが信じるように、手助けしたにすぎません。6 私の仕事は、あなたがたの心に種をまくことでした。アポロの仕事は、それに水をやることでした。しかし、あなたがたの心の中でそれを生長させたのは神様であり、私たちではありません。7 まく者も、水をやる者も、さほど大切ではありません。大切なのは、生長させてくださる神様なのです。8 アポロも私も、同じ目標を目指して働いていますが、それぞれ、その労苦に従って報酬を受けるでしょう。9 私たちは神様の協力者にすぎません。あなたがたは、

私たちの畑ではなく、神様の畑です。私たちの建物ではなく、神様の建物です。

10 神様は恵みによって、私に、どうしたら腕のよい建築家になれるかを教えてくださいました。私が土台をすえ、アポロがその上に建物を建てました。しかし、その土台の上に建物を建てる者には、細心の注意力が必要です。11 私たちがすでに持っている本物の土台——イエス・キリスト——以外に、土台をすえることなど、だれにもできないからです。12 しかし、この土台の上には、いろいろな材料で建てることができます。金や銀や宝石を使う人もいれば、また、木や草、あるいは、わらなどを用いる人もあります。13 やがて、すべてがテストされる、キリストのさばきの日が来ます。その時には、建築家が各自どんな材料で建てたか明白になります。それぞれの仕事は火でテストされ、なお、価値が変わらないかどうか、ほんとうに完璧な建物かどうか、だれの目にも明らかになります。14 そして、その土台の上に適切な材料を使って建てた人は、建物があとに残るので、報酬を受けます。15 しかし、家が焼けてしまった人は、大損害をこうむります。ただその人自身は、炎の中をくぐり抜けるように、命からがら救われるでしょう。

16 あなたがたは、自分たちがお互いに神の家であり、神の御霊が、その中に住んでおられることが、わからないのですか。17 もし、神の家を汚したり、こわしたりする人がいれば、神様はその人を滅ぼされます。なぜなら、神の家はきよく聖なるものだからです。あなたがたは、その神の家なのです。

18 自分をだますのはやめなさい。「世間一般からすれば、自分は人並み以上のりこう者だ」と、もし考えているのなら、そんな考えはかなぐり捨てて、むしろ、ばかになるほうが身のためです。天からの真の知恵を受ける妨げにならないためです。19 この世の知恵は、神様から見れば愚かだからです。旧約聖書のヨブ記に、「神は人の知恵を、その人を捕らえるわなとして用いられる」と書いてあるとおりです。つまり、人は自分の「知恵」につまずいて倒れるのです。20 また、詩篇には、「主は、人間の考えや判断がどんな程度か、また、それがどんなに愚かしく無益か、よく知っておられる」とあります。21 ですから、この世の知者の弟子であることを誇ってはなりません。神様はすでに、あなたがたに必要なものは全部与えてくださっているからです。22 パウロも、アポロも、ペテロも、あなたがたを助けるために、神様がお遣わしになったのです。神様は全世界を、あなたがたの益になるよう与えてくださいました。生も、また死さえも、あなたがたの配下です。現在のもものも、将来のもものも、すべては、あなたがたの手にあります。23 そして、あなたがたはキリスト様のもの、キリスト様は神様のものです。

四

1 こういうわけで、アポロや私を、神の特別の計画を説明し、その祝福を配って回る、キリスト様の家来と考えてください。2 ところで、家来にとって一番大切なことは、主人の命令に従うことです。3 さて、私の場合はどうでしょう。良い家来だったでしょうか。この点に関して、あなたがたがどう考えようと、また、ほかの人がどう思おうと、

私は少しも気にしません。この件については、自分の判断さえ、信用していないのです。

4 良心にやましいところは、さらさらありませんが、だからといって、安心しきっているわけでもありません。調べた上で判決をお下しになるのは、主ご自身だからです。

5 ですから、主がまだお帰りにならないうちから、ある人が良い家来かどうか、せっかちに結論を下すことがないように注意しなさい。主が来られる時、すべては明るみに出されます。一人一人の心の奥底までが見通され、ありのままの姿が、だれの目にもはっきり見えるようになります。その時、私たちが、なぜ主の仕事をしてきたのか、だれにもわかるようになります。そして、一人一人が、ふさわしい賞賛を神様から受けるのです。

6 これまで私は、アポロと自分を例にあげて説明してきました。ある人を特別にえこひいきしてはならないことを、教えたかったのです。神様がお立てになった教師の一人を、他の教師以上に誇ってはなりません。7 いったい何について、そんなに得意になるのですか。あなたの持ちもので、神様からいただかないものがありますか。その全部が神様からいただいたものなら、どうして、さも偉そうにふるまうのですか。また、自力で何かを成し遂げたような態度をとるのですか。

8 あなたがたは、自分に必要な霊の食べ物みな、すでに手にした、と思っているようです。十分に満ち足り、霊的に満足しています。私たちを差し置いて、裕福な王様になり、王座にふんぞり返っています。ああ、ほんとうに王座についていたらよかったのに。そうすれば、いつか私たちも、その王座で、あなたがたと共に君臨できたでしょうに。9 しばしば、こんな思いが私に浮かびます。神様は私たち使徒を、死刑を目前にした捕虜のように凱旋行列の最後に引き出し、人々や御使いの前で見せ物にされたのだ、と。

10 信仰のために私たちが愚か者になったと、あなたがたは言います。そういうあなたがたは、もちろん、たいそう賢い、分別あるクリスチャンですとも。私たちは弱くて、あなたがたは強いのです。人受けのよいあなたがたと違って、私たちは笑いものにされています。11 今の今まで、私たちは飢えと渇きに悩まされ、寒さをしのぐ着物さえありませんでした。自分の家もなく、どこへ行っても、冷たくあしらわれるばかりでした。

12 また、生活のために、自ら汗水流して働きました。私たちをのろう人たちを、かえって祝福し、危害を加えられても耐え忍び、13 ののしられても、おだやかに答えるのが常でした。それなのに、今この時に至るまで、私たちは、まるで足もとのちりや、ごみのようです。

14 このように書いたのは、あなたがたに恥をかかせるためではありません。愛する子供として戒め、さとすためです。15 たとい、キリスト様のことを教えてくれる人が一万人いたとしても、あなたがたの父はこの私だけであることを、忘れないでください。良い知らせを伝えて、キリスト様に導いたのは、この私一人なのですから。16 そこで、お願いがあります。どうか、私の模範にならい、同じ行ないをしてください。

17 その点であなたがたの助けになればと思い、テモテを遣わします。彼は、私がキリスト様に導いた一人で、主にあって愛し、信頼できる息子だからです。彼は、クリスチ

ンとしての私の生き方を、私が行く先々の教会で教えているとおりに、あなたがたに思い出させてくれるでしょう。

18 中には、「パウロはこちらへ来て話をつけるのがこわいのだ」と、思い上がっている人たちがいるそうですね。19 しかし、もし主のお許しがあれば、私はすぐにでも行くつもりです。そうすれば、その高慢な人たちが、ただ大きなことを言っているだけか、それとも、ほんとうに神様の力を持っているのか、わかるでしょう。20 神の国は、ことばだけのものではありません。神の力によって生きることなのです。21 さあ、どちらを選びますか。私が罰と叱責をもって行くほうですか。それとも、愛とやさしい心をもって行くほうですか。

五

1 あなたがたの間に起こった、ひどい出来事について、みんながうわさをしています。それは、「異教徒」でもしてかさないほどの不始末で、父の妻（おそらく、ママ母のこと）と不義の関係にある人が、教会にいるそうではありませんか。2 それでもなお、自分たちは「霊的」だと白を切るつもりですか。どうしてそのことで嘆き悲しみ、恥じないのですか。なぜその人を教会から除名しないのですか。

3 4 いっしょにはいませんが、私もこの問題をよく考えてみました。そして、実際にその場に居合わせたように、主イエス・キリストの御名によって、すでに対策を決めました。さっそく教会で集会を開きなさい。——その時、主イエスの力があなたがたと共にあり、私も霊において出席します。——5 そして、その人を罰するために、教会から追放して、サタンの手に引き渡しなさい。そうするのは、主イエス・キリストが帰って来られる時に、その人のたましいが救われるようにと願うからです。

6 潔白さを誇るあなたがたが、こんな事件に目をつぶっているかと思うと、ぞっとします。たとい一人でも、罪を犯すままに放任しておけば、やがてその影響が全員に及ぶことが、わからないのですか。7 恐ろしい癌であるその人を、あなたがたの間から除きなさい。そうすれば、きよさを保てます。神の小羊であるキリスト様は、私たちのためにすでに殺されたのです。8 ですから、悪意や不正でいっぱい、癌に冒された古い生活から、全く離れなさい。しっかりキリスト様につながり、クリスチャン生活において、力強く成長しようではありませんか。悪意や不正のまじったパンではなく、栄誉と誠実と真実の純粋なパンを、食べようではありませんか。

9 私は以前、あなたがたに手紙で、悪い人たちと交際しないように書き送りました。10 しかし、それは、性的な罪を犯している者、欲張りの詐欺師、どろぼう、偶像を拝む者、というような不信仰者とは口もきくな、という意味ではありません。そのような人たちから離れていようとすれば、この世では、とうてい生きていけないからです。11 私がほんとうに意図したところは、自分はクリスチャンだと公言している者で、しかも性的な罪にふける者、食欲な者、人をだます者、偶像を拝む者、酒に酔う者、口ぎたなくののしる者とはつき合うな、ということです。そのような者と共に食事をするさえいけま

せん。

1 2 1 3 教会外の人たちをさばくことは、私たちの務めではありません。 神様お一人のなさることです。 しかし、教会員でありながら、このような罪を犯す者がいたら、きびしい処置をとることは、当然です。 その悪い人を処罰し、教会から除名しなければなりません。

六

1 クリスチャン同士の争いが生じた場合、どちらが正しいかを、他のクリスチャンに判断してもらおうとせず、異教徒の法廷に訴え出るとは、いったいどういうつもりですか。 2 いつか、私たちクリスチャンがこの世をさばき、支配する日が来ることを知らないのですか。 この世こそあなたがたにさばかれる運命にあるのに、どうしてあなたがたは、内輪のそんなささいな事件さえ解決できないのですか。 3 クリスチャンは、天の御使いさえもさばくようになることがわからないのですか。 この地上での自分たちの問題をさばくくらい、朝飯前のはずです。 4 それなのに、なぜ、教会外の、クリスチャンでもない裁判官のもとへ出向くのですか。 5 あえてあなたがたに恥をかかせようと、私はこう言うのです。 いったい教会には、こうした争いを解決できる賢明な人が、一人もいないのですか。 6 それで、クリスチャンがクリスチャンを訴え、しかも、それを異教徒の前に持ち出すようなまねをするのですか。

7 そもそも、訴え合うこと自体が、クリスチャンにとって、すでに敗北です。 なぜ、不正な仕打ちに甘んじようとしないのですか。 むしろ、だまされるほうが、もっと主に喜ばれるでしょう。 8 ところが、あなたがたは不正を行ない、だまし取り、しかも兄弟（信仰を同じくする人）に対して、そんなことをしているのです。

9 1 0 こんな者が神の国を相続できないのは、当然ではありませんか。 思い違いをしてはいけません。 不道德な生活をしている者、偶像を拝む者、姦淫する者や同性愛にふける者は、神の国を相続できません。 どろぼう、貪欲な者、酒に酔う者、人をそしる者、強盗も同様です。 1 1 あなたがたの中にも、そんな過去をもつ人がいます。 しかし、主イエス・キリストと神の御霊のおかげで、今や罪は洗い流され、あなたがたは神様のために聖なる者とされ、神様に受け入れられているのです。 1 2 キリスト様が禁じておられること以外、私には、何でもする自由があります。 しかしその中には、自分のためにならないこともあります。 たとい、してよいことであっても、それに捕らえられたら最後、やめようとしても簡単にやめられないことには、手を出しません。 1 3 たとえば、食べることについて考えてみましょう。 神様は、物を食べるために食欲を与え、消化するために胃を備えてくださいました。 しかし、だからといって、必要以上に食べてよい、ということにはなりません。 食べることが第一だなどと考えるはいけません。 なぜなら、いつの日か神様は、胃も食べ物も取り上げるからです。

しかし、性的な罪は絶対にいけません。 私たちの体は、そんなことのためにではなく、主のために造られたのです。 そして、主ご自身が、私たちの体に住もうと願っておられ

ます。 14 神様は、主イエス・キリストを復活させたのと同じ力で、私たちの体をも、死人の中から復活させようとしておられます。 15 あなたがたの体は、事実、キリスト様の体の一部であることが、わからないのですか。 キリスト様の体の一部と売春婦とを結びつけるようなことをしてよいのでしょうか。 とんでもないことです。 16 もし人が売春婦と結びつくなら、その人と彼女は一心同体になることが、わからないのですか。 というのは、神様が聖書の中で言われるとおり、神様の目には、二人の者は一人とみなされるからです。 17 しかし、自分を主にささげるなら、その人とキリスト様は、一人の人として結び合わされるのです。

18 性的な罪とは無縁になりなさいと、私が言うのは、そのためです。 これほど体に悪影響を及ぼす罪は、ほかにありません。 この罪を犯すことは、自分の体に対して罪を犯すことです。 19 体は、神様があなたがたに与えてくださった聖霊の家であって、聖霊様がそこに住んでおられることが、まだわからないのですか。 あなたがたの体は、自分のものではありません。 20 神様が多額の代価を払って、あなたがたを買い取ってくださったからです。 ですから、あなたがたの体のどの部分も、神様の栄光を現わすために用いなさい。 その所有者は神様だからです。

七

1 さて、この前の手紙にあった質問に答えましょう。 もし結婚しないなら、それは良いことです。 2 しかし、普通の場合、結婚するのが一番良いでしょう。 男はそれぞれ妻を、女も夫を持ちなさい。 そうでないと、不品行の罪に陥る危険があるからです。

3 夫は妻に、妻が当然受けるものを、すべて与えなければなりません。 妻もまた、夫に同様の義務を負っています。 4 結婚した女性は、もはや自分の体を自分の思いのままにする権利はありません。 妻の体に対する権利は、夫にもあるからです。 同様に、夫も、もはや自分の体を自分の一存で、どうこうすることはできません。 妻も、夫の体に対する権利を持っているからです。 5 ですから、互いにこの権利を拒んではなりません。 ただ一つの例外があります。 ひたすら祈りに専心するため、二人が合意の上で、一定の期間、夫婦生活から離れる場合です。 そのあと、二人はまたいっしょになるべきです。 それは、自制力の弱さにつけ込む、サタンの誘惑を避けるためです。

6 私は、結婚しなければならない、と言っているのではありません。 ただ、結婚したければ、してもかまわない、と言っているのです。 7 私の願いは、だれもが私のように、結婚しないでもやっていけることです。 しかし、人それぞれです。 神様は、ある人には、夫となり妻となる恵みを与え、ほかの人には、独身のまま幸福にすごす恵みを与えておられます。 8 さて、独身者と未亡人にひとこと言いますが、もし私のようにしていられるなら、独身のままでいるほうが良いのです。 9 しかし、もし自制できないなら、ためらわずに結婚しなさい。 情欲を燃やすよりは、結婚するほうが良いからです。

10 次に、結婚した人たちには、こうしたほうが良いと、単に忠告するのではなく、はっきりと命令しておきます。 この命令は、私が考え出したものではありません。 主ご自

身からの命令です。 妻は、夫と別れてはいけません。 11 しかし、もしすでに別れているなら、そのまま一人にいるか、夫のもとに帰るかしなさい。 また、夫も、妻を離縁してはいけません。

12 ここで、少し私の考えを、付け加えておきましょう。 これは主からの直接の命令ではありませんが、私が正しいと思っていることです。 夫がクリスチャンで妻はそうでない場合、いっしょにいることを妻が望むなら、追い出したり離婚したりしてはいけません。

13 また、妻がクリスチャンで夫はそうでない場合も、夫がいっしょにいることを望むなら、離婚してはいけません。 14 なぜなら、クリスチャンでない夫は、クリスチャンの妻の助けによって、クリスチャンになるかもしれないからです。 また、同様のことが、クリスチャンでない妻の場合にも言えるからです。 もし家族がバラバラになってしまったら、子供たちは主を知る機会を失うことになります。 一方、家族が一つにまとまっていれば、神様の計画によって、子供たちも救われる可能性があるのです。

15 しかし、もしクリスチャンでない夫や妻が、どうしても別れたいと言うなら、そうさせなさい。 こんな時、別れようとする相手を、むりに引き留めるべきではありません。 神様は、自分の子供たちが仲良く平和に暮らすことを望んでおられるからです。 16 なぜなら、結局のところ、妻にとって、いっしょにいれば夫がクリスチャンになるという保証はなく、夫にとっても、妻がクリスチャンになる保証はないからです。

17 しかし、これらを決めるにあたっては、結婚するにしてもしないにしても、神様の導きと助けに従い、どんな立場に置かれようとも、それに甘んじ、神様の御心にかなった生活をしている、と確信しなさい。 私はどこの教会でも、このように指導しています。

18 たとえば、クリスチャンになる前に、すでにユダヤ教の割礼（男子が生まれて八日目にその生殖器の包皮を切り取る儀式）を受けた人は、それを気にしてはいけません。 また、割礼を受けていない人は、今さら割礼を受けるべきではありません。 19 クリスチャンには、割礼を受けているかどうかで、違いはないからです。 しかし、真に神様を喜ばせ、神様の戒めを守っているかどうかでは、大きな違いがあります。 この点が重要なのです。

20 たいていの場合、人は、神様に召された時にしていた仕事を続けるべきです。 21 あなたが奴隷でも、そのことを気にしてはいけません。 しかし、もし自由の身になる機会があれば、もちろん自由になりなさい。 22 もし奴隷のあなたが主に召されたのなら、キリスト様は恐ろしい罪の力からあなたを解放して、自由の身にしてくださったことを忘れてはなりません。 また、もしあなたが自由人であって、主に召されたのなら、今はキリスト様の奴隷であることを忘れてはなりません。 23 あなたがたは、キリスト様が、代価を払って買い取ってくださった身であり、キリスト様のものなのです。 ですから、こうした、この世の誇りや恐れの上べてから、自由になりなさい。 24 愛する皆さん、クリスチャンになった時の状態がどんなものであろうと、その状態にとどまっていなさい。 主が今、助けてくださるからです。

25 さて、今度は別の質問を取り上げましょう。未婚の女性は結婚してもよいか、ということでしたね。この問題について、私は主からとりたてて命令を受けたわけではありません。しかし、主は恵みによって私に、人々から信頼されるに足る知恵を授けてくださいました。それで、喜んで私の見解を申し上げます。

26 クリスチャンは、現在、大きな危機に直面しています。そこが問題なのです。このような時には、結婚しないのが一番良いと考えます。27 だからといって、もちろん、すでに結婚している人は別れてはなりません。しかし、もし結婚していないなら、このような時に、結婚を急いではなりません。28 しかし、もし男性が、どうしても結婚しようと決心し、いま結婚したとしても、それは正しいことです。また、このような時に女性が結婚したとしても、罪を犯すわけではありません。ただし、結婚すれば、余計な問題をかかえ込むことになるでしょう。今は、そんな目に会ってほしくないのです。

29 私たちに残された時間はきわめて短く、主の仕事をする機会もきわめて少ないのです。そんなわけで、妻のある者も、主のために、できるだけ身軽にしていなければなりません。

30 喜びとか、悲しみとか、財産などが、神様の仕事をする妨げになってはなりません。

31 この世の魅力的なものに接する機会の多い者たちは、その機会を正しく利用し、おぼれることがないようにしなさい。現在あるがままの世界は、やがて過ぎ去るからです。

32 何をするにしても、あなたがたがあれこれ思いわずらわないようにと願います。独身の男性の場合、時間を主の仕事のためにささげることも、どうしたら主に喜んでいただけるかを常に考えることもできます。33 しかし、結婚した男性は、そうはいきません。

どうしても、この世での責任や、妻を喜ばせることに、気を取られがちになります。34

こうして、彼の関心は分散するのです。結婚した女性についても、同様のことが言えます。同じ問題に直面するのです。独身の女性は、何とかして主に喜ばれる者になりたい、主に喜ばれることをしたいと心を配ります。しかし、結婚した女性は、家事や、夫の好ききらいまで、いろいろ考えないわけにはいきません。

35 私がこう言うのも、あなたがたのためを思うからであって、結婚させまいとしているわけではありません。私が願うのは、あなたがたが、思いを主からそらすようなことは、できるだけ避けて、主に仕えるのに役立つことは何でもすることなのです。

36 しかし、もし、高まる感情を抑えるのがむずかしいので結婚すべきだ、と考える人がいれば、それも結構です。罪ではありません。そういう人は結婚しなさい。37 しかし、もし独身でいるだけの意志力を持ち、自分は結婚する必要もないし、むしろ、しないほうが良いと考えるなら、その決心はりっぱです。38 つまり、結婚する人は、良いことをしているのであり、結婚しない人は、もっと良いことをしているのです。

39 妻は、夫が活着ている間は、夫の一部です。しかし、夫が死ねば、再婚してもかまいません。ただし、その場合、相手はクリスチャンに限ります。40 けれども、私の考えでは、もし再婚しないでいられるなら、そのほうが、はるかに幸せでしょう。神の

御霊からの助言をいただいて、私はこう言うのです。

八

1 次に、偶像に供えられた物を食べることはどうか、という質問に答えましょう。この件については、だれもが、自分の判断は正しいと思っています。しかし、自分の万全の知識がどんなに重要に思えても、教会を建て上げるためにほんとうに必要なのは、愛です。

2 もし、自分はどんな問題にも答えられる、と思いがっている人がいたなら、それは、自らの無知をさらけ出しているにすぎません。3 しかし、ほんとうに神様を愛している人は、神様に知られているのです。

4 では、先ほどの問題はどうなるでしょう。偶像に供えた肉を食べてもよいのでしょうか。私たちはみな、偶像など実際には神ではなく、神様はただお一人だけで、ほかにはいないことを知っています。5 ある人は、偉大な神々は天にも地にも数多いと考えています。6 しかし私たちは、父なる神ただお一人しかいないことを知っているのです。この神様が、万物を創造し、人間をご自分のものとして造られたのです。また私たちは、ただ一人の主、イエス・キリストがおられることを知っています。この方が、すべてのものを造り、私たちにいのちを与えてくださるのです。

7 けれども、クリスチャンの中には、このことがわかっていない人もいます。そういう人は、これまでずっと、偶像を生きているもののようによく考えてきたので、ただの偶像に供えられたにすぎない物を、あたかも、実在する神々に供えたかのように思ってしまうのです。そのため、それを食べる時にひどく気になり、傷つきやすい良心が痛むのです。8 ただ、このことを覚えておいてください。神様は、私たちがそれを食べるか食べないかなど、気にかけておられません。食べなくても損にはならないし、食べても得をするわけではありません。9 ただし、いくら自由だといっても、あなたがたがそれを食べたために、あなたがたよりも良心の弱いクリスチャンが罪を犯すようなことにならないよう、くれぐれも注意しなさい。

10 あなたが、偶像への供え物を食べても別に害にはならないことを知っていて、神殿の食堂で食事をしたとしましょう。それを、食べてはいけないと思っている人が見たら、どうでしょうか。その人は、いつもそれは悪いことだと思っているのに、つい気持ちがゆるんで、自分もそれを食べてしまうでしょう。11 すると、あなたは、それを食べても差しつかえないことを知っていたために、傷つきやすい良心を持った兄弟に、信仰上の大きな損害を与えた責任を負うことになります。キリスト様は、その兄弟のためにも死んでくださったのです。12 ある行為は悪いと信じている兄弟が、あなたがたのふるまいに刺激されて、その行為をしてしまうなら、あなたがたはその兄弟に罪を犯し、同時に、キリスト様に対しても罪を犯すことになるのです。13 ですから、もし偶像に供えた肉を食べることで、兄弟に罪を犯させるなら、私は一生、それを食べません。私の兄弟に罪を犯させたくないからです。

九

1 私は使徒、すなわち神様の使者ですから、単なる人間に対して責任を負っているわけではありません。 私は、実際、この目で、主イエスを見た者です。 あなたがたの人生が一変したのは、私が主のために一生懸命働いた結果なのです。 2 たとい、ほかの人が私を使徒と認めなくても、あなたがたにとって、私は確かに使徒なのです。 あなたがたは、私を通してキリスト様に導かれたのですから。 3 私の権利をとやかく問題にする人たちに対しては、次のように答えることにしています。

4 いったい、私には、どんな権利もないのでしょうか。ほかの使徒たちのように、あなたがたの家で、客としてもてなしてもらい権利はないのでしょうか。 5 もし私にクリスチャンの妻があればの話ですが、ほかの弟子や主の兄弟やペテロ同様、妻を連れて旅行もできないのでしょうか。 6ほかの使徒はあなたがたから生活費をもらっているのに、バルナバと私だけは、生活のために働き続けなければならないのでしょうか。 7 いったい、自費で軍務につかなければならない兵士がいるのでしょうか。 丹精した作物を食べる権利のない農夫の話など、聞いたこともありません。 世話をしている羊や、やぎの乳も飲めない羊飼いがいるのでしょうか。 8 私は、ただ人間の考えだけを引き合いに出して、権利がどうのこうのと言うものではありません。 神様のおきてでは、どうなっているか示しましょう。 9 神様は、モーセにお与えになったおきての中で、「穀物を踏んで脱穀している牛に口輪をかけて、その穀物を食べる自由を奪ってはならない」と言っておられます。 神様は牛のことだけを心に掛けて、こう言われたのだと思いますか。 10 私たちのことも、心に掛けておられたのではないのでしょうか。 もちろんそうです。 クリスチャンの働き人が、その人のおかげで益を受ける人々から報酬をもらうのは当然であることを、神様は教えたかったのです。 耕す者も脱穀する者も、当然、収穫の分け前にあずかることを、期待してよいのです。

11 私たちはあなたがたの心に、良い霊の種をまきました。 とすれば、そのお返しとして食べ物や着物を要求するのは、行き過ぎでしょうか。 12 あなたがたは、神のこトバを伝えてくれたほかの人たちには、そうした必需品を提供しています。 それは当然のことです。 すると、なおさら私たちは、それらを要求する権利があるはずではありませんか。 けれども、一度も、この権利を持ち出したことはありません。 かえって、働いて自活し、援助を受けませんでした。 どんな報酬も求めなかった理由は、キリスト様の良い知らせをせっかく伝えても、報酬のために、あなたがたの関心が薄れるのではないかと心配したからです。

13 神の宮での奉仕者は、神様にささげられる食べ物の一部を自分のために取るように、という神様の命令を、知らないのですか。 また、祭壇の前で働く人々は、主へのささげ物の分け前をいただくのです。 14 同じように、主は、良い知らせを宣べ伝える者は、それを信じるようになった人々から生活を支えてもらうべきだ、と命じておられます。 15 けれども、私はあなたがたに、ビター文要求したことはありません。 それに、今からでもそうしてほしいと、それとなく、ほのめかしているのでもありません。 実を言えば、

無報酬であなたがたに良い知らせを宣べ伝えることの満足感を失うくらいなら、飢え死にしたほうがましです。 16 それというのも、良い知らせを宣べ伝えても、別に私の名誉にはならないからです。 たとい、やめたいと思っても、やめるわけにはいきません。 もしやめたら、全くみじめなことになります。 それを宣べ伝えなかったら、私は災いに会います。

17 もし自分から進んで、この務めを引き受けたのであれば、主は私に特別な報酬を下さるでしょう。 しかし、実際はそうではなかったのです。 神様が私を選び出して、この聖なる任務につかせてくださったのであって、選ぶ自由などなかったのです。 18 このような状況で、私の受ける報酬とはどんなものでしょう。 だれにも負担をかけず、自分の権利を少しも主張せずに、良い知らせを宣べ伝えることから来る特別の喜び、これこそ、私の報酬なのです。

19 これにはまた、すばらしい利点があります。 だれからも給料をもらわないということは、だれにも気がねがいらないということです。 けれども、一人でも多くの人をキリスト様に導くために、自ら進んで、また喜んで、すべての人の奴隷となりました。 20 ユダヤ人といっしょにいる時は、ユダヤ人のようにふるまいます。 それによって、彼らが良い知らせに耳を傾け、キリスト様に導かれるためです。 また、ユダヤ教の習慣や儀式を守っている外国人といっしょにいる時は、私自身はそのことに同意していなくても、議論したりはしません。 何とかして、彼らを助けたいからです。 21 異教徒といっしょにいる時は、できるだけ、彼らに合わせるようにしています。 もちろん、クリスチャンとしての正しさだけは失わないように、気をつけますが。 こうして、彼らに合わせることによって、その信頼を得、彼らをも助けることができるのです。

22 ささいなことで、すぐに良心を悩ませる人たちのそばでは、自分の知識をひけらかすような行動をしたり、「それは考えが足りない」などと指摘したりはしません。 そうすると、彼らのほうでも心を開いてくれて、力になることができます。 そうです。 キリスト様のことを話し、その人が救われるためには、私はどんな人に対しても、対等の立場に立とうと心がけています。 23 これは、良い知らせを伝えるためであり、また、キリスト様に導かれる彼らを見て、私自身も祝福を受けるためでもあります。

24 競走をする場合、優勝者は一人だけです。 ですから、あなたがたも、優勝するように走りなさい。 25 優勝するには、ベストを尽くせるよう、何事にも節制しなければなりません。 競技の選手は、この世のメダルや優勝杯を得ようと、あらゆる困難と戦い、ひたすらトレーニングに励みます。 しかし私たちは、神様から与えられる、決して朽ちない栄光を受けるために、そうするのです。 26 ですから私は、ゴールを目指して、わき目もふらずに、全力で走ります。 勝つために戦うのです。 空を打つようなボクシングをしたり、おもしろ半分に走ったりもしません。 27 競技の選手のように、自分の体をむち打って、きびしく鍛練し、自分の気分のままにではなく、なすべきことができるよう、訓練しています。 そうでないと、ほかの人たちを競技に参加させておきながら、自

分は失格者として、退場を命じられるかもしれないからです。

■

一〇

1 愛する皆さん。昔、私たちの先祖が荒野でどんな経験をしたか、決して忘れてはなりません。神様は、雲を案内役として立て、彼らを導きました。また、全員が安全に紅海を通り抜けるように導きました。2 これは、彼らの「バプテスマ」であった、とみなしてよいでしょう。彼らは、モーセに従う者として——すなわち、指導者であるモーセにすべてを任せて——海と雲によって、バプテスマを受けたのです。3 4 さらに神様は、奇蹟によって、荒野で彼らに、食べ物と飲み水をお与えになりました。彼らは、キリスト様から水をいただいたのです。キリスト様は、信仰に新しい力を与える力強い岩として、いっしょにおられたのでした。5 それにもかかわらず、大部分の者が神様に従わなかったので、神様は、荒野で滅ぼしてしまいました。

6 この事実から、大切な教訓を学べます。悪事を追い求めてはならないこと、7 また、偶像を拝んではならないことです。〔旧約聖書には、金の子牛を拝むために「人々は座っては飲み食いし、立っては踊った」と書いてあります。〕

8 ほかに、教訓があります。彼らのうちのある人たちが外国人の女と不道德な罪を犯した時は、一日のうちに二万三千人もが死にました。9 また、彼らのように、主がどれだけ忍耐してくださるかを、試すようなまねをしてはなりません。主を試そうとした人たちは、蛇にかまれて死にました。10 また、彼らのように、神様に向かって文句を言ったり、「神様のなさり方は不当だ」などと、不平を並べてはなりません。それゆえに、神様は御使いを遣わして、彼らを滅ぼされたのです。

11 先祖たちの身に起こった、これらのことは、同じことをくり返すなど私たちに警告する実例、すなわち、生きた教訓です。それが記録されたのは、世の終わりが近づいている今、私たちがそれを読んで、彼らの例から教訓を学ぶためにほかなりません。

12 ですから、よく注意しなさい。「私は、そんなことは絶対にしないから大丈夫」などと思っている人がいれば、そういう人こそ、よくよく注意しなければなりません。同じ罪を犯すかもしれないからです。13 ただ、このことを覚えていてください。あなたがたの生活の中に入り込む悪い欲望は、別に新しいものでも、特別なものでもないということです。ほかに多くの人たちが、あなたがたよりも先に、同じ問題にぶつかってきたのです。どんな誘惑にも、抵抗するすべはあります。神様は決して、とても打ちできないほどの誘惑に会わせたりは、なさいません。神様がそう約束されたのであり、神様の約束は必ず実行されるのです。神様は、あなたがたが、誘惑に忍耐強く立ち向かえるように、それから逃れる方法を教えてください。14 ですから、愛する皆さん、偶像礼拝は、どんなものでも、用心深く避けてください。

15 あなたがたは頭がよいのですから、私の言うことが正しいかどうか、自分で考え、判断してください。16 私たちが聖餐式で主の食卓に着き、ぶどう酒を飲んで、主の祝福

を求める時、それは、そのぶどう酒を飲む者がみな、キリスト様の血の祝福を共に受けることを、意味しないでしょうか。 また、一つのパンをちぎって共に食べる時、それは、私たちがキリスト様の体の恩恵を共に受けることを、示すのではないのでしょうか。 17 私たちの数がどんなに多かろうと、問題ではありません。 みな同じパンを食べて、同じキリスト様の、体の部分であることを示すのです。 18 ユダヤ人のことを考えてごらん下さい。 供え物を食べる者はみな、それによって一つとされているのです。

19 私は何を言おうとしているのでしょうか。 異教徒たちが供え物をささげる偶像は、実際に生きているとか、ほんとうの神であるとか、あるいは、偶像への供え物に何か価値があるとか、言おうとしているのでしょうか。 とんでもありません。 20 私が言いたいのは、偶像に物を供える人は、もちろん神様にではなく、悪霊にささげる点で、みな一つに結ばれているということです。 あなたがたの中から、偶像への供え物を異教徒たちと共に食べたりして、悪霊の仲間になる人など、一人も出てほしくありません。 21 主の食卓の杯と悪霊の食卓の杯の両方を飲むことはできません。 同じように、主の食卓のパンと悪霊の食卓のパンを、両方とも食べることなどできません。

22 いったい、あなたがたは、主を怒らせようとしているのですか。 自分が主よりも強いとでも言うのですか。 23 もし食べたければ、偶像への供え物を食べても、一向にかまいません。 その肉を食べても、神様のおきてに反しません。 しかし、だからといって、それをどんどん食べてよい、ということにはなりません。 たとい、少しもおきてに反しないことでも、最善とは限らず、また有益でない場合もあるのです。 24 自分のことばかり考えてはいけません。 他人を思いやり、何がその人にとって最善か、よく考え下さい。

25 こうすればよいのです。 市場で売られている肉は、どれでも自由に食べなさい。 それが偶像に供えられた物かどうか、いちいち尋ねなくてよいのです。 そうすれば、良心を傷つけることもないでしょう。 26 地と、地上にある良いものはみな、主のものであり、あなたがたを楽しませるために、あるのですから。

27 クリスマンでない人から食事に招待された場合、行きたければ、行ってかまいません。 そして、出される物は、何でも食べなさい。 それについて、いちいち尋ねてはいけません。 尋ねなければ、偶像に供えられた物かどうかわからないし、食べて良心が傷つく心配もありません。 28 しかし、もしだれか、「この肉は偶像に供えられたものです」と注意してくれる人がいたら、その人のために、またその人の良心のために、出された肉を食べるのはやめなさい。 29 この場合、肉についての自分の判断よりも、相手の考えが、大切なのです。

しかし、あなたはこう言うでしょう。 「なぜ、他人の考えに支配されたり、束縛されたりしなければならないのですか。 30 神様に感謝してそれを食べることができれば、他人から、とやかく言われる筋合いは、ないではありませんか。」 31 では、その理由を申しましょう。 つまり、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神様の栄光のために

すべきだからです。 32 ですから、相手がユダヤ人であれ、外国人であれ、クリスチャンであれ、だれをも、つまずかせてはいけません。 33 これは、私の生活の原則でもあります。 私は、何をするにも、すべての人に喜ばれようと務めています。 自分のしたいことや、つごうの良いことをするのでなく、人々が救われるのに最善のことをするので

――

1 私がキリスト様の模範にならっているように、あなたがたも、私の模範にならってください。 2 愛する皆さん。 あなたがたが私の教えを忘れず、すべてそのとおり実行していることを、とてもうれしく思います。 3 しかし、知っておいてほしいことが一つあります。 それは、妻は夫に責任があり、夫はキリスト様に責任があり、キリスト様は神様に責任がある、ということです。 4 ですから、男が祈ったり説教をしたりする時、帽子を取らないなら、キリスト様を侮辱することになります。 5 また、女が頭にかぶり物を着けずに、人前で祈ったり預言したりすれば、夫を侮辱することになります〔かぶり物は、夫に対する服従のしるしだからです〕。 6 何もかぶりたくないなら、いっそ髪もそってしまいなさい。 もし頭をそるのが女として恥ずかしいことなら、かぶり物を着けなさい。 7 しかし、男は何もかぶるべきではありません〔礼拝の時の女の帽子は、男への服従のしるしだからです〕。

男は神様に似せて造られたのであり、神様の栄光の現われです。 女は男の栄光の現われです。 8 最初の男は女から造られたのではなく、最初の女が男から造られたのです。 9 また、最初の男アダムは、エバのために造られたのではなく、エバが、アダムのために造られたのです。 10 そういうわけで、女は、男の権威の下にあるしるしとして、頭にかぶり物を着けなければなりません。 すべての御使いたちがそれを認めて、喜ぶためです。

11 しかし、神様の計画では、男と女は、お互いを必要とし合う存在であることを、忘れてはなりません。 12 なぜなら、最初の女は男から造られたとは言っても、それ以後、男はすべて、女から生まれたからです。 そして、男も女も、両方をお造りになった神様から出ているのです。

13 あなたがたは、この問題について、実際にどう考えますか。 女がかぶり物も着けずに人前で祈ることは、正しいでしょうか。 14 15 女が頭をおおうことは、感覚的にもきわめて自然ではありませんか。長い髪は女の誇りだからです。ところが、男の長い髪は恥なのです。 16 たとい、この点について別の意見の人がいても、私はこのようにしか教えません。 すなわち、女が教会で公に預言したり祈ったりする時は、必ずかぶり物を着けなさい、と。 このことは、どこの教会でも同じように考えています。

17 さて、もう一つ、私が不服に思っている事を書きます。 あなたがたの聖餐式の集まりが益になるところか、かえって、害になっているように思えるからです。 18 その席で議論し合い、分裂がますます深刻化していると、私の耳にも伝わってきます。 ですから、それを信じないわけにはいきません。 19 たぶん、あなたがたは、だれが正しいか

はっきりさせるには、分裂もやむをえないと思っているのでしょう。

20あなたがたの集まりは、主の晩餐のためではなく、21自分たちの食事をするためのものです。ほかの人と分け合おうと待っている人など、一人もいず、早い者勝ちにがつがつ食べているそうではありませんか。おかげで、十分食べられずにお腹をすかしている者もいれば、浴びるほど飲んで酔っぱらっている者もいる、ということです。22何ということでしょう。ほんとうに、そうなのですか。食べたり飲んだりなら、自分の家でできるではありませんか。そうすれば、教会の名誉を傷つけたり、食べ物を持って来られない貧しい人たちに、恥をかかせたりしないですみます。このことについて、何と言ったらよいでしょう。ほめてでも、もらいたいのですか。まさか！ そうはいきません。

23なぜなら、以前あなたがたに伝えたとおり、聖餐式について、主ご自身がこう言われたからです。すなわち、ユダが主イエスを裏切った日の夜、主イエスはパンを取り、24神様に感謝の祈りをささげてから、ちぎって弟子たちに与え、こう言われました。「取って食べなさい。これは、あなたがたのために引き裂かれる、わたしの体です。わたしを思い出すために、このようにして食べなさい。」25夕食の後、同じように、ぶどう酒の杯を取って言われました。「この杯は、神様とあなたがたとの間の新しい契約です。この契約は、わたしの血によって立てられ、効力を発します。これを飲むたびに、わたしを思い出すため、このようにしなさい。」26ですから、あなたがたは、このパンを食べ、杯を飲むたびに、「主は私たちのために死んでくださった」という主の死の意味を、くり返し告白するわけです。主が再び来られる時まで、続けなさい。

27ですから、もしふさわしくない態度でこのパンを食べ、主の杯を飲む人がいれば、彼は、主の体と血とに対して罪を犯すことになります。28ですから、聖餐に臨む前に、めいめいが注意深く、自分を反省しなければなりません。29もしキリスト様の体を気にもかけず、その意味を考えもせず、ふさわしくないままでパンを食べ、杯を飲むなら、神様のさばきを招くはめになります。キリスト様の死をもてあそんだわけですから。30あなたがたの中に弱い者や病人が多く、また死者も出たのは、そのためです。

31しかし、食べる前に、注意深く自分を反省するなら、さばきや懲らしめを受けることはありません。32けれども、私たちが主にさばかれ、懲らしめられるのは、この世の人々といっしょに有罪を宣告されないためです。33こういうわけですから、愛する皆さん、主の晩餐〔聖餐式〕に集まる時は、皆がそろそろまで待ちなさい。34ほんとうに空腹な人は、家で食べなさい。それは、いっしょに集まりながら、自分の身に罰を受けないためです。

そのほかのことは、そちらに行ってから、お話ししましょう。

一二

1さて、皆さん。聖霊様があなたがたに授けてくださった特別な才能について、書きたいと思います。この点で、少しの誤解もないようにと願うからです。2覚えがあると

と思いますが、あなたがたはクリスチャンになる前、ひと言も口がきけない偶像のもとへ、あちこち出かけたものでした。 3ところが、いま接している人たちは、自分は神の御霊から託されたことばを語っている、と主張する人たちです。 その人たちがほんとうに神様に導かれているのか、それとも、ただそんなふりをしているだけか、どのようにして見分ければよいでしょう。 そのためには、次の点に注意しなさい。 すなわち、神の御霊の力を受けている者はだれも、イエスをのろうことはできないし、また、聖霊様の助けがなければ、だれも、ほんとうの意味で、「イエスは主です」と告白できない、という点です。 4ところで、神様は私たちに、いろいろな種類の特別な才能を与えてくださっていますが、みな、聖霊様から出たものです。 5神様への奉仕はいろいろですが、私たちは同一の主に使われているのです。 6神様は私たちの生活の中で、いろいろな方法で働きかけてくださいます。 しかし、神様のものとされた私たちの中で、また私たちを通してお働きになるのは、ただ一人の神様です。 7聖霊様は、教会全体の利益のために、私たちを通して神様の力を現わしてくださるのです。

8御霊様はある人に、賢明な助言者としての才能を与えておられます。 またある人には、研究し、人に教える点ですぐれた才能を与えておられます。 9また、ある人には特別な信仰を与え、ある人には病気を治す力を与えておられます。 10そのほか、奇蹟を行なう力が与えられている人もあれば、預言や説教をする力をいただいている人もいます。 また御霊様は、ある人には、「自分は神のことばを与えられている」と主張する人が、ほんとうに神の御霊によって語っているかどうかを見分ける力を、与えておられます。 そしてさらに、ある人には、異言〔今まで知らなかったことば〕で語る能力を与え、同時に、別の人にその異言を解き明かす能力を、授けておられるのです。 11こうしたすべての賜物と力は、同一の聖霊様が思いのままに、私たちにくださるのです。

12人体には多くの部分がありますが、その各部分が結び合わされて、一つの体が成り立っています。 キリスト様の「体」についても、同じことが言えます。 13私たちはそれぞれ、キリスト様の体の一部です。 ある者はユダヤ人、ある者は外国人、ある者は奴隷、ある者は自由人です。 しかし、聖霊様は、私たちをみな結び合わせて、一体としてくださいました。 私たちは、ただ一人の御霊様によって、キリスト様の体に結び合わされるバプテスマ（洗礼）を受け、みな、同じ神の霊を与えられているのです。

14確かに、体はただ一つの部分からではなく、多くの部分から成り立っています。 15たとえ足が「私は手ではないから、体の一部ではない」と言いはったところで、体の一部でなくなるわけではありません。 16また、もし耳が「私は耳で、目ではないから、体の一部ではない」などと言ったら、どうでしょう。 そんなことで、耳が体から離れることができますか。 17考えてもごらんください。 もし体全体が目であれば、聞くことができますでしょうか。 もし体全体が巨大な一つの耳なら、においをかぎることができるでしょうか。 18しかし、神様は私たちの体を、そのように造られたものではありません。 体のために多くの部分を造り、各部分を思い通りに配置されました。 19もし体が単一の器官で

きていたら、それこそ、ばけものです。 20ですから、神様は多くの器官を造られました。 しかし、やはり体は、ただ一つなのです。

21目が手に、「私には、あなたなんか必要じゃない」などとは、決して言えません。 また、頭が足に、「あなたなんかいない」とも言えません。

22それどころか、一番弱く、一番不要だと思われる部分が、実は、最も必要なのです。 23そうです。 私たちは、むしろ余分と思える部分が与えられていることを、特に喜ぶのです。 そして、人目にさらすべきでない部分は、人目から注意深く守ります。

24一方、見られてもよい部分は、もちろん、特別な注意を要しません。 そのように、神様は、あまり重要視されない部分が特別に重んじられ、注意深く扱われるように、体を組み立ててくださったのです。 25それは、各部分が幸福になり、互いにいたわり合うためです。 26もし一つの部分が苦しむなら、すべての部分が共に苦しみます。 そして、一つの部分が重んじられれば、すべての部分が喜ぶのです。

27そこで、私は次のことを言いたいのです。 すなわち、あなたがたは共に、キリストという一つの体であり、一人一人が、なくてはならない部分である、と。 28キリスト様は、自分の体である教会を形成する個々の部分として、人々を次のように任命されました。

使徒、

預言者〔神のことばを伝える者〕、

教師、

奇蹟を行なう者、

病気を治す力のある者、

人々を援助する者、

人々の働きを管理する者、

異言で話す者。

29皆が使徒でしょうか。 もちろん違います。 皆が説教者でしょうか。 違います。 皆が教師でしょうか。 皆が奇蹟を行なえるでしょうか。 30皆が病気を治せるでしょうか。 もちろん、そんなことはできません。 神様は全員に、異言で話す能力を与えておられるのでしょうか。 またそれを、皆が理解し、解き明かすことができるのでしょうか。

31そんなことはありません。 しかし、あなたがたは、これらの賜物より、もっと大切なものを、全力を尽くして求めなさい。

ところで、まず、これらの賜物よりもすぐれたものについて教えましょう。

一三

1たとい私に、異言（今まで知らなかったことば）で話す才能があり、また、天と地のあらゆることばを話すことができても、人を愛していなければ、ただの騒音にすぎません。

2同様に、預言をする才能があり、将来の出来事を予知し、あらゆることに通じていても、人を愛さないなら、何の役に立つでしょう。 また、山を動かすほどの強い信仰を持って

いても、愛がないなら、私には何の値打もないのです。 3そして、自分の財産を全部、貧しい人たちに分け与えても、また、良い知らせを宣傳えるために火あぶりの刑に甘んじて、愛がなければ、何の値打もありません。

4愛はきわめて忍耐強く、親切です。 愛は決してねたみません。 また、決して自慢せず、高慢になりません。 5決して思い上がり、自分の利益を求めず、無礼なふるまいをしません。 愛は自分のやり方を押し通そうとはしません。 また、いらいらせず、腹を立てません。 人に恨みをいだかず、人から悪いことをされても、気にしません。 6決して不正を喜ばず、真理が勝つ時は、いつも喜びます。 7だれかを愛する人は、どんな犠牲をはらっても、誠実であろうとするでしょう。 また、いつもその人を信じ、その人に最善を期待し、いのちがけで、その人を守り抜くでしょう。

8神様からいただいた特別の賜物や力は、いつかは尽きるものです。 しかし、愛は永遠に続きます。 預言すること、人の知らないことばで語ること、特別な知識などの賜物は、やがて消え去ります。 9たとい、特別な才能が与えられていても、いま私たちの知っていることは、ほんの一部にすぎません。 また、最高の才能に恵まれた人の説教でも、貧弱なものです。 10しかし、私たちが完全無欠な存在とされる時、これら不完全な賜物は不要になり、消え去ってしまうのです。

11それは、こんなことから説明できるでしょう。 子供の時の私は、子供のように話し、子供のように考え、子供のように判断していました。 しかし、大人になると、考え方も成長して、子供時代とは違い、今では子供っぽいこととは縁を切りました。 12同様に、今の私たちの神様に対する知識や理解は、そまつな鏡にぼんやり映る姿のようなものです。 しかし、やがていつかは、面と向かって、神様の完全な姿を見るのです。 いま私が知っていることはみな、おぼろげで、ぼんやりしています。 しかしその時には、いま神様が私の心を見通しておられるのと同様、すべてが、はっきりわかるでしょう。

13いつまでも残るのが三つあります。 信仰と希望と愛です。 その中で一番すぐれたものは愛です。

一四

1愛を、最高の目標にきなさい。 それと共に、聖霊様が与えてくださる特別な才能、特に、神様のことばを伝える預言の賜物を求めなさい。

2しかし、もしあなたが、異言を語る〔すなわち、今まで知らなかったことばで話す〕場合、それは神様への語りかけであって、人々へではありません。 人々には、そのことばが理解できないからです。 あなたは、御霊の力によって語るのですが、それはみな、秘密の事柄なのです。 3しかし、神様からのことばを語る者は、人々を励まし、慰め、人々の主にある成長を助けます。 4ですから、「異言を語る」者は、自分の信仰を成長させますが、神様のことばを語って預言する者は、教会全体が幸福になることと、きよくなることとを助けるのです。

5もちろん私は、あなたがたがみな、「異言を語る」才能を与えられることを望んでいます。

しかし、それにもまして、神様のことばを語って預言してくれることを望みます。なぜなら、聞いたこともないことばで話すよりも、預言することのほうが、はるかにまさっており、有益だからです。——もっとも、異言のあとで、その内容をわかるように説明できるなら、それも、少しは役立つでしょう。

6 愛する皆さん。私があなたがたのところで、異言を語ったとしても、どうしてプラスになるでしょう。しかし、もし神様から与えられたひらめきを語り明かし、また、いま私にわかっていることや、これから起こることや、神のことばの真理を語るなら、それは、あなたがたにとって必要かつ有意義なことです。7 異言で語るより、はっきりした、わかりやすい国語で語るほうがよいことは、笛やハープのような楽器のことを考えてみても、わかります。はっきりした音色が出なければ、どんな曲を演奏しているのか、だれにもわからないからです。8 もし軍隊のラッパ手が、はっきりした音を出さなければ、それが戦闘の合図であっても、兵士にはわかりません。9 相手に理解できないことばで話しかける場合も、同様です。まるで、だれもいない空間に、話しかけるようなものです。

10 世界には、非常に多くのことばがありますが、どのことばも、それがわかる人にはすばらしいものです。11 ところが私には、ちんぷんかんぷんなのです。そのようなことばで話しかけてくる人と私とは、お互いに外国人同士ということになります。12 あなたがたは、聖霊様が下さる特別の賜物を、熱心に求めているのですから、教会全体の益となるような、最善のものを求めなさい。

13 異言で話す才能を与えられている人は、そのことばを自分で理解する力も与えられるように祈りなさい。そうすれば、あとで、人々にわかりやすく説明できます。14 もし私が、自分でも理解できないことばで祈るなら、霊では祈っていても、自分では何を祈っているのかわかりません。15 では、どうすればよいのでしょうか。私は二通りのことをします。異言で祈り、また、だれにでもわかる普通のことばでも祈るのです。異言で賛美し、また、自分にもわかるように、普通のことばでも賛美するのです。16 もしあなたが、異言を用いて、霊だけで神様を賛美し、感謝をささげても、それを理解できない人たちは、どうして、いっしょに賛美できるでしょう。また、どうして、いっしょに感謝できるでしょう。17 確かに、あなたは心からの感謝をささげていることでしょう。しかし、そこにいる人たちには、何の益にもならないのです。

18 私は、個人的には、あなたがたのだれよりも多く「異言を語る」ことを、神様に感謝しています。19 しかし、公の礼拝の場では、異言で一万語話すよりも、人々に役立つ五つのことばを話すほうが、ずっとよいのです。

20 愛する皆さん。こんな道理がわからないような子供であってはなりません。悪事をたくらむことにかけては、無邪気な赤ん坊でありなさい。しかし、こうしたことを理解する点では、知恵のある大人になりなさい。21 旧約聖書に次のように書いてあります。神様は、外国語で自分の民に語るために、外国人を遣わされるが、それでもなお、民は耳を傾けない、と。22 「異言」は、信者のためではなく、信じない人々のさばき

のしるしとして語られるのです。けれども、預言〔神の深い真理を説くこと〕は、クリスチャンにとって必要なもので、クリスチャンでない者は、まだ、それを聞く準備ができていません。

23 それにしても、まだ救われていない人や、この才能を持っていない人が教会に来て、皆が聞いたこともない国のことばで語っている現場に出くわしたら、きっと気違いだと思いうでしょう。24 しかし、もしあなたがたが、神様のことばを語って預言しているなら〔たといその説教が、主として信者向けのものであっても〕、まだ救われていない者やクリスチャンになったばかりの者〔すなわち、そのようなことがわからない者〕も、みんなの説教によって、自分が罪人であると、はっきり自覚するでしょう。そして、耳にする一つ一つのことばによって、良心を刺されるでしょう。25 そのうちに、心の中の隠れた思いがあらわれ、ついには、「神様は、ほんとうにあなたがたと共におられます」と叫んでひれ伏し、神様を礼拝するでしょう。

26 さて、皆さん、私の言わんとすることをまとめてみましょう。あなたがたが集まる時には、ある人は賛美し、ある人は教え、ある人は神様から教えられた特別の知識を語ります。ある人は異言を話し、またある人は、その異言の内容を人々に説明します。ただし、これらはすべて、全体の益となり、一同が主にあって成長できるよう役立つものでなければなりません。27 異言で話すのは、せいぜい二人か、多くても三人どまりにしないさい。しかも、一度に一人が話し、その内容を解き明かせる人がそばにいないければなりません。28 もし解き明かしのできる人がいなければ、声に出して語ってはいけません。公に語るのではなく、ひとり言か、または神様に向かって語りなさい。

29 預言の才能に恵まれている人の場合も、一人ずつ二人か三人が預言しないさい。そして、ほかの人はみな、それを聞くのです。30 しかし、だれかの預言中に、別の人に主から特別のお告げとか考えが与えられたら、先に話していた人は口をつぐみなさい。31 このようにして、預言の才能に恵まれている人はみな、代わる代わる話しなさい。そして、だれもが学び、励まされ、助けを受けるのです。32 神様からことばを与えられている人は、自分の番まで自制して待つ能力も与えられていることを、忘れてはなりません。33 神様は、無秩序や混乱を喜ばれません。調和を愛する神様ですから、どの教会にも、この調和があるのです。

34 女は教会の集会では黙っていないさい。口をはさんではいけません。なぜなら、聖書にもはっきり記されているように、女は男に服従すべきだからです。35 もし何か質問があれば、家で夫に尋ねなさい。教会の集会で意見を述べることは、女としてふさわしくないからです。

36 この考えに文句がありますか。神様のお心を知るのは、自分たちコリントの信者だけの特権だ、とでも思っているのですか。それなら、まちがっています。37 預言の才能や、そのほか聖霊様が与えてくださる才能に恵まれていると自認する人はまず、私の主張自体が主からの命令であると、認めなければなりません。38 しかし、それでもな

お賛成できないなら、そんな人は、無知のまま放っておきましょう。

39ですから、信仰の友である皆さん、神様からのことばをはっきりと語れる預言者になれるよう、熱心に願いなさい。 また、「異言を語る」のはよくないなどと、決して言うてはなりません。 40ただし、何事も適切に秩序正しく行なうようにしなさい。

一五

1 さて、皆さん、良い知らせとはほんとうは何なのか、思い出してほしいのです。 というのも、それは少しも変質していず、以前あなたがたに宣べ伝えた良い知らせと同じものだからです。 あなたがたは、それを喜んで受け入れました。 そして今に至っています。 信仰が、このすばらしい知らせにしっかり根ざしているからです。 2 もし初めにいい加減な気持ちでその良い知らせを信じたのでなく、今もなお、それを堅く信じているのなら、この良い知らせは、あなたがたを救ってくれるのです。

3 私はまず第一に、かつて自分も知らされた、次のことを伝えました。 すなわち、キリスト様は、聖書に記されているとおり、私たちの罪のために死なれ、 4 葬られたこと、そして預言者たちの予告どおりに、三日目に墓の中から復活されたことです。 5 キリスト様はペテロに姿を現わし、そのあと「十二弟子」の残りの者の前にも立たれました。 6 そしてある時には、五百人以上のクリスチャンの前にも、姿をお見せになったのです。 その中の何人かはもう死にましたが、大部分は今も健在です。 7 それから、キリスト様はヤコブに、そして使徒たち全員に現われました。 8 そして最後に、未熟児みたいな私の前にも現われてくださったのです。 9 私は、使徒の中では一番ちっぽけな者であり、使徒と呼ばれる資格さえない者です。 神の教会の迫害者だったのですから。

10 しかし、今の私があるのは、ただひとえに、あふれるほどに注がれた神様の恵みと、あわれみとのおかげです。 この恵みとあわれみは、むだではありませんでした。 なぜなら、私はほかのどの使徒たちよりも、よく働いてきたからです。 とはいえ、実際に働いたのは私ではありません。 神様が私の内部で働き、祝福してくださったのです。 11 一番よく働いたのが、私であろうとだれであろうと、そんなことは問題ではありません。 大切なのは、私たちが良い知らせを宣べ伝え、あなたがたが、それを信じたという事実です。

12 しかし、これだけは言わせてください。 私たちが伝えたとおり、あなたがたが、キリスト様の死からの復活を信じているのなら、なぜ、「死んだ者は二度と生き返らない」と言ったりする人が出るのですか。 13 もし死人の復活がないなら、キリスト様は、今も死んだままのはずです。 14 もしそれが事実なら、私たちが宣べ伝えていることはすべてむだであり、神様に対するあなたがたの信頼もむなしく、価値のない、絶望的なものとなるのです。 15 そして、使徒はみな、うそつきということになります。 なぜなら、「神様はキリスト様を、墓から復活させられた」という私たちの主張は、もし死人の復活がないのなら、当然、うそになるからです。 16 もし死人が復活しないのなら、キリスト様は、今なお死んだまま、ということになります。 17 そして、神様が救ってくださ

ると信じ続けることは、全くばかげており、あなたがたは、今なお有罪宣告を受けたまま、ということになります。 18 また、すでに死んだクリスチャンは、みな、滅んでしまったことになります。 19 もしクリスチャンであることが、この世の生活でしか価値がないのなら、私たちほどみじめな者はありません。

20 しかし、事実、キリスト様は死人の中から復活しました。そして、復活が約束されている何千万何百万もの人の、復活第一号となられたのです。

21 一人の人〔アダム〕の行為によって、死がこの世に入って来ました。そして、このもう一人の人〔キリスト〕の行為によって、今や、死人の復活は事実となったのです。 22 人はみな、罪深いアダムの子孫として、その血縁のために、死ななければなりません。罪のあるところには、その結果として、死もあるのです。しかし、キリスト様と血縁関係にある者はみな、やがて復活します。 23 ただし、順番があります。最初にキリスト様が復活なさいました。次に、キリスト様が帰って来られる時に、彼に属する全員が復活します。

24 そのあとで、終わりが来ます。その時、キリスト様はあらゆる敵を滅ぼし、国を父なる神にお渡しになります。 25 王としてキリスト様が支配なさるのは、敵を全滅させる時までだからです。 26 その敵の中には、最終の敵である死も入っています。死もまた、打ち破られ、とどめを刺されなければならないのです。 27 というのは、キリスト様には、すべてのものを支配する権威が、父なる神から授けられているからです。ただ、すべてのものと言っても、この支配権をお授けになった父なる神だけは、もちろんキリスト様の支配下に含まれません。 28 キリスト様は、ついにあらゆる敵との戦いに勝利を収めると、神の子として、自分を父なる神の支配におゆだねになります。それは、子にすべてを征服する力をお授けになった神様が、最終的に、最高の存在となられるためです。

29 もし死人の復活がないのなら、死んだ人のためにバプテスマ（洗礼）を受ける人たちには、何の意味があるのですか。将来の死人の復活を信じてもしないのに、どうしてそんなことをするでしょう。

30 また、なぜ私たちは、いつも死に直面し、いのちの危険にさらされるのに、甘んじているのでしょうか。 31 事実、私は毎日、死に直面しています。このことは、あなたがたの主にある成長を、私が誇るのと同じように、確かなことです。 32 もし私が、この地上の生涯のために、野獣——それはエペソの人たちのことですが——と戦ったのだとしたら、どれだけの価値があるでしょう。死後の復活などありえないのなら、「大いに飲み食いして、愉快地に過ごそう。文句があるか。どうせ明日は死ぬ身だ。死ねば、何もかもおしまいなのだ」ということになります。

33 そう言う人たちにだまされてはいけません。それに耳を傾けていると、同じ状態に陥ってしまいます。 34 目を覚まして、罪を犯すのをやめなさい。恥をかかせるつもりで、あえて申しますが、あなたがたの中には、神様について実際には何も知らない、全

くクリスチャンらしくない人がいます。

35 しかし、こう聞く人もいるでしょう。「死人は、どのように復活するのですか。どんな体になるのですか。」 36 なんとばからしい質問でしょう。畑を見れば、わかるではありませんか。まいた種は、まず死ななければ、芽を出しません。 37 そして、その種から出る緑の芽は、初めの種とは全く別物です。土にまくのは、麦でも何でも、干からびた小さな種粒だからです。 38 ところが神様は、その種に、それぞれにふさわしい、美しく新しい体を与えてくださいます。それで、いろいろな種類の種から、それぞれ植物が生長してくるのです。 39 いろいろな種類の種や植物があるように、肉にもいろいろな種類があります。人間、獣、鳥、魚は、それぞれみな異なっています。

40 天の御使いは、私たちとは全く異なった体を持っています。その美しさや栄光は、人間の体の美しさや栄光とは異なっています。 41 太陽には太陽の栄光があり、月や星には別の栄光があります。一つ一つの星にも、美しさや輝きに違いがあります。

42 同じように、死んだら朽ち果てる、私たちの地上の体は、復活の時に与えられる体とは異なったものです。復活の体は決して死にません。 43 今の体は、病気や死で、私たちに悩まします。しかし、復活の時には、それは栄光に満ちたものとなるのです。確かに、今は死ぬべき弱い体ですが、復活の時には、力にあふれた体となるのです。 44 今は死ぬべき人間の体にすぎませんが、復活の時には、神様から与えられる超自然の体になります。自然のままの人体があるように、神様からの超自然の体も存在するのです。

45 旧約聖書には、「最初の人アダムは、自然のままの人間の体を与えられた」と書いてあります。しかし、キリスト様は、アダムより、はるかにまさった方です。なぜなら、いのちを与える方となられたからです。

46 初めはこのような体をまとっている私たちに、後には、神様が天上の体を下さるのです。 47 アダムは地上の土から造られた者ですが、キリスト様は天から来られた方です。

48 人間はだれでも、アダムと同じ土の体を持っています。しかし、キリスト様のものとなった人はみな、キリスト様と同じ、天から与えられる体を、持つようになるのです。

49 今アダムと同じ体を持っている私たちは、そのように、いつの日かキリスト様と同じ体を持つのです。

50 愛する皆さん。念を押しておきます。地上の、血と肉の体は、神の国から閉め出されます。今の私たちの体は死ぬべきもので、永遠に生きることはできません。 51 しかし、ここで驚くべきことを告げましょう。それは、神様のすばらしい特別の計画です。私たちは全滅するものではありません。新しい体をいただくのです。 52 終わりのラッパが鳴り渡る時、一瞬のうちに、そうなるのです。天からラッパの音が響くと、死んでいたすべてのクリスチャンは、たちまち、絶対に死なない、新しい体に復活します。次に、まだ生き残っている私たちもまた、一瞬にして、新しい体になるのです。 53 なぜなら、地上の、死ぬべき今の体は、天上の、決して死ぬことのない、永遠に生きる体に変えられなければならないからです。

54 この時、「死は勝利にのみ込まれた」という旧約聖書のことばが、現実となるのです。

55 56 「死よ。 おまえの勝利はどこにあるのか。

死よ。 おまえのとげはどこにあるのか。」

罪、すなわち死をもたらすとげは、ことごとく切り取られます。 そして、罪をあばくおきても、もはや私たちをさばきません。 57 これらすべてのゆえに、どう神様に感謝したらよいでしょう。 神様は、主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださるのです。

58 そこで愛する皆さん、このように将来の勝利は確実なのですから、しっかり立って、動揺することなく、いつも、主の働きに熱心に励みなさい。 なぜなら、復活は確かであり、主のための働きが、決してむだ骨に終わらないことを、あなたがたは知っているからです。

一六

1 さて、エルサレムのクリスチャンあての献金については、次のようにお願いしたいのです。〔この件に関しては、ガラテヤの諸教会にも同様に通知しておきました。〕 2 日曜日ごとに、めいめいが、前の週の収入の一部を別にしておいて、この献金にあてなさい。その額は、主の助けによって得た収入に応じて決めなさい。 私がそちらに行ってから、一度に全部集めることなど、ないようにしてください。 3 私が着いたら、使者として信頼できる人たちを、あなたがたに選んでもらい、手紙をことづけて、エルサレムに派遣し、その愛の贈り物を届けさせましょう。 4 私も同行するほうがよければ、そうしましょう。 5 私は、まずマケドニアに行ってから、あなたがたを訪問する予定です。 マケドニアには、ちょっと立ち寄るだけです。 6 しかし、あなたがたのところでの滞在は、かなり長びくでしょう。 もしかしたら、ひと冬を過ごすかもしれません。 そうなれば、あなたがたに送られて、次の目的地へ向かえます。 7 今は、旅の途中でちょっとだけ会い、すぐにいとまごいなど、したくないのです。 主のお許しがあれば、しばらく滞在したいと思っています。 8 ただ、五旬節（ユダヤ教の祭りの一つ）までは、エペソを離れません。 9 というのは、ここで、良い知らせを宣べ伝えるための門戸が、広く開放されているからです。 しかし、それだけにまた、敵対する者も多いのですが……。

10 テモテが着いたら、あたたかく迎えてやってください。 私と同様、主の仕事に励んでいる人です。 11 彼が若いからといって、見下したり、無視したりしないでください。 そちらでのすばらしい体験を胸に、喜び勇んで、彼が帰って来られるようにしてください。 私は、彼の一行の帰りを、首を長くして待っています。 12 私はアポロにも、ほかの人たちと共にコリントへ行くよう、しきりに勧めたのですが、彼には、今、それが神様の望んでおられることだとは、どうしても思えないようです。 あとで機会があれば、行くでしょう。

13 目を覚まして、霊的な危険に身構えていなさい。 いつも、主に忠実でありなさい。 勇らしく行動し、強くありなさい。 14 すべての点で、親切と愛から出た行動をとりな

さい。

15 ステパナとその一家を覚えているでしょう。ギリシヤで最初にクリスチャンになった人たちです。今、あちこちのクリスチャンのために、熱心に援助や奉仕の活動をしています。16 どうか、彼らの指示には従ってください。また、彼ら同様、あなたがたのために真心から献身的に働いている人たちを、できる限り助けてください。17 ステパナとポルトナトとアカイコの来訪を、心から喜んでいます。この人たちは、離れていて手助けできないあなたがたに代わって、助けてくれたのです。18 彼らから私が受けた励ましは大きく、たいへん勇気づけられました。あなたがたもきっと、同様に励まされたことでしょう。心から感謝してほしいのです。

19 アジヤの諸教会から、くれぐれもよろしくとのこと。アクラとプリスカ、また、礼拝のためにその家に集まっている人々がみな、心からよろしくと言っています。20 こちらの友人たち全員が、よろしくとのこと。あなたがたも、会った時には、互いに愛のこもったあいさつを交わしなさい。

21 この手紙の最後のことは、私が自分で書きます。22 もし主を愛さない人があれば、その人はのろわれます。主イエスよ、来てください。23 主イエス・キリストの愛と恵みが、あなたがたと共にありますように。24 私の愛が、キリスト・イエスにあつて、あなたがた一同と共にありますように。

パウロ

■